

旧水戸彰考館跡

水戸市三の丸2-9-22（水戸市立第二中学校）

JR常磐線の水戸駅から北へ約400メートル、令和2年（2020）2月に再建された旧水戸城の大手門をくぐると水戸市立第二中学校があります。ここには、水戸藩第2代藩主、徳川光圀が編纂を始めた『大日本史』の編纂所であった彰考館がありました。

徳川光圀は明暦3年（1657）に「正しい日本の歴史を書き残そう」という考えのもとに、江戸駒込の藩邸で『大日本史』の編纂を始め、その編纂所を寛文12年（1672）、小石川の藩邸に移して彰考館と名付けたのが始まりとされています。光圀が隠居した後、元禄11年（1698）には編纂所を水戸城内にも設け、主な職員を水戸に移しました。そのため、しばらくは、江戸と水戸の二つに彰考館が存在しました。

彰考館は、「彰往考来」という中国の言葉からとりました。「昔からの歴史を正しくはっきりさせ、これからの人の生き方を考える」という意味です。この言葉は、歴史を学ぶ意味にも通じるものです。ただ単に何年に何があったということだけでなく、その出来事から何を学び、これからのことを考えていくということが歴史を学ぶというなのでしょう。その後、彰考館は歴史書の編纂の場だけではなく、様々な史料が集められたために水戸藩の学問の場にもなりました。水戸藩では『大日本史』を編纂するために光圀の時代には藩



予算の3分の1を毎年費やしました。優秀な学者がいると聞くと、水戸藩で雇い入れました。『水戸黄門漫遊記』の助さんのモデルとなった佐々宗淳もその一人で、以前は京都のお坊さんでした。しかし、『大日本史』に予算をたくさん費やしたことが、水戸藩の財政難の原因の一つにもなりました。

『大日本史』は、光圀が活着ている間に完成せず、『大日本史』と名付けられたのも光圀の死後でした。光圀の死後も水戸藩では細々と編纂を続け、幕末になると江戸の編纂所が廃止され、水戸の彰考館だけとなりました。明治維新となり、水戸藩がなくなっても、水戸徳川家の事業として編纂が続けられ、明治39年（1906）に、全402巻が完成したのです。

茨城教育 第八六九号

令和四年六月二十日発行

編集責任者 鹿志村 則男

発行人 鹿志村 則男

発行所 一瞥閣 茨城県教育会

水戸市見和一 一三五六一一

電話 〇二九一三二一 二七四七

印刷所 有限会社山田軽印刷所